



復刊第149号
題字 吉岡 弥生

年頭所感

会長 佐藤 千代子

新春のお慶びを申し上げます。
先生方には年の始めに当り、それぞれのお仕事の充実と、誰しもが常に心に描いている意義ある変革への希求が新たな緊張感を増して、心晴れやかに新春をお迎えになられたことと存じます。

一昨年、昨年と日本の経済情勢好転もままならない状況の中で、社会を震撼させたオウム事件に引続き、血液製剤によるエイズ感染、これに関与した医療指導者の権威主義と企業の営利第一主義には憤りを超えた悲しさを覚えました。さらに追打ちをかけるように厚生官僚による福祉施設の汚職事件「人の生命は地球よりも重い」人間社会における真理が同じ、しかも指導的立場にある人間の物欲によって簡単に踏みじられてしまう恐ろしさ、しかし考えてみますと、女性にはこのような愚行は

まずありません。この点からみても女性には男性をコントロール出来る自然の能力を持っているといってもいいのではないのでしょうか。

今、国会で審議されております医療保険制度の改革案はどのような決着が図られるかはわかりませんが、日本の医療保険制度は、世界に誇る長寿国というすばらしい結果をもたらしました。医療費が高んできたという単に経済的側面からのみでこれを改革することが、将来にいかなる健康被害を生じるか心配です。二十世紀の少子高齢社会は労働力低下の中で社会の活力が失われる時代です。それ故にこそ、医療、保険、福祉の整合性を強め、健康社会を強化することが、いかなる政策よりも優先されるべきではないかと考えます。昨年は、女性にとって非常に向上きの年であったことは嬉しいことで

した。高度な技術や専門知識そして体力を必要とするあらゆる職域への進出は目覚ましいものがありました。そして女性たちは堂々とその職務を果たしていますが、社会全般を見渡したとき、潜在的な性差別意識は相変わらずで、男女共生の社会にはいまいと一つの感があります。男女とも相手を認めあつてお互いの能力を高めあつていくという社会の成熟度がまだ十分でないともいえますが、これも女性自身が既成事実の積み重ねと努力によって解決を図ってゆかねばならないと思います。

平成7年に開催されました日本女医学会のシンポジウム「女医の未来像」に引き続き、昨年の福岡総会においても、公開シンポジウム「未来を開く女医の役割」が開催され、女医の現状認識と将来展望、それに基づく自己開発が熱心に討議され、参加者それぞれに心に深い意義と信念を投影いたしました。

平成8年11月30日には第10回ワークショップ「私の時代の研修を語る」を開催、昭和20年代より50年代のそれぞれを代表し、四人のスピーカーの方が話されました。過去の経験も現在、未来への貴重な階段であったことを再認識すると共に、若い世代の方々の自信に満ちた姿を眩しく頼もしく感動致しました。この席で平成8年7月に開催されました「日本医学教育学会」において学長代行として運営の任に当られました橋本葉子学術部理事より「現在の医学教

もくじ

年頭所感.....佐藤千代子 (1)

〈年頭所感〉

- 秋田・金子ミサヲ (2)
- 群馬・角田智恵子 (2)
- 埼玉・加島 なみ (2)
- 神奈川・森田 和子 (2)
- 足立・小宮山節子 (2)
- 板橋・大畑 信子 (2)
- 北・河野美美子 (2)
- 品川・柿島八千代 (3)
- 渋谷・脇田 昌子 (3)
- 新宿・竹下 寿子 (3)
- 中野・大谷 明子 (4)
- 都下西・名取 静子 (4)
- 岡山・杉 久子 (4)
- 佐賀・諸井ミサヲ (4)
- 鹿児島・長友由紀子 (4)

〈第10回ワークショップ〉

- 「私の時代の研修を語る」を開催.....平敷 淳子 (4)
- 学生時代の体験—20年代.....中濱 昌子 (5)
- 私の研修時代—30年代.....山口 知子 (6)
- 私の時代の研修を語る—40年代.....坂本 雅子 (6)
- 私の研修時代—50年代.....岩平 佳子 (7)

武蔵野市における日本女医学会公開講演会.....丸茂 晶子 (8)

○第42回定時総会のおしらせ..... (3)

○第24回国際女医学会議のおしらせ..... (4)

平成7年度日本女医学会学位取得者一覧表..... (9)

理事会議事録..... (9)

会員動静..... (10)

編集後記..... (10)

年*頭*所*感

育のあり方一特にテュートリアル教育... 先生方に新しい認識と関心を持って...

秋田支部

金子 ミサヲ

年あらたまり、初春のお慶びを申し上げます...

群馬支部

角田 智恵子

明けましておめでとございます...

埼玉支部

加島 なみ

新年おめでとございます...

神奈川支部

森田 和子

新年のおよろこびを申し上げます...

足立支部

小宮山 節子

最後に本部の種々な企画に感謝...

板橋支部

大畑 信子

明けましておめでとございます...

北支部

河野 芙美子

私は東京支部連合会学術部に籍を...

社団法人日本女医学会第42回定時総会のお知らせ

新しい年を迎え、諸先生方にはご清祥にてご活躍のこととお慶び申し上げます...

東京都支部連合会による行事

- 5月23日(金) 歌舞伎 5月興業「団菊祭」
5月24日(土) 朝食会
5月25日(日) ゴルフコンペ(武蔵ヶ丘カントリークラブ)

品川支部 柿島 八千代

あけましておめでとございます...

一方、高齢化社会の到来で、医療・年金・福祉などが大きな課題とな...

私たちが医師として、社会に貢献したい気持ちを抱き職業についてお...

渋谷支部

脇田 昌子

明けましておめでとございます...

新宿支部

竹下 寿子

一九九七年、明けましておめでと...

評議員および予備評議員の改選

定款施行細則第二十六条により各支部において、評議員一名、予備評議員一名(再任可)を選出され、平成9年3月末日までに本部にお届けください。

財団法人 日本女医学会 東京都支部連合会

決したらいかがでしょうか。テレビ、新聞で毎日報道された数々の問題にただ驚くばかりです。少子化、高齢化社会に対する対応、薬害エイズの問題、O-157、阪神大震災の被災地はまだ元に戻っていないようです。オウム事件の被害者の方々も同様でしょう。

今年こそは、私どもの経験を生かしてみんなが直面しているこれらの宿題を出来るだけ早く解決し、来たるべき二〇〇〇年に向けて、力強く歩いて行きたいと考えております。

中野支部
大谷明子

人生に何を積みかさねてゆけばよいのかとの問いかけが、心に浮びます。東京都支部連合十年の歩みという立派な記念の本をいただき諸先生の並々ならぬご努力のあとを知り私も少しもあやかりたいと存じました。与えられた医師の仕事に精を出し、社会にも眼をむけ、人とのふれ合いを大切に、自分自身も心豊かに、急がず休まず、平凡に残る人生を楽しみ、過ごしてまいりたいと思います。

都下西支部
名取静子

明けましておめでと。ございます。昨年は、女医学会の先生方からいろいろお世話になりました。社会的にも経済的にもなげかわしいことがたびたびおきました。今年はどうにか落ち着いてきて、明るいさざしのみられるような状況であればと願っています。

岡山支部
杉久子

日本女医学会の会員の皆様、会長をはじめ理事の方々、事務局の皆様、日々のご苦勞を尊敬し感謝いたします。現今医学、薬学業界のつきつきの新発見、発明はめざましく、ただただ驚愕のいたります。世情も変動著しく、事件も多発します。テレビ、新聞などですぐ知ることができ、情報過多で良かったり悪かったり、老人には刺激が強すぎます。

第10回ワークショップ 「私の時代の研修を語る」を開催

学術部主催の第10回ワークショップ「私の時代の研修を語る」は平成8年11月30日(出京王プラザホテル)で約七〇名の参加を得て行われました。昭和20年代から50年代まで十年ごとに各年代を代表する四名の講師の先生方のご講演をうかがいました。

学術部
平敷淳子

各専門をバックに極めて格調の高いものでした。会場からは関西医大を代表して前理事の二村先生から、東邦医大からは現理事の加藤先生から先生がたの研修時代を加えていただくこともできました。先人の築き上げて下さった道を後輩の女医が守り、かつ発展させていかななくてはならな

い使命を強く感じましたのは、私一人ではないとおもいます。多くの参加者から「元気づけられました」、「勇気づけられました」というご賛同が得られ、企画者としてとても嬉しい思いに浸ることもできました。この誌上をお借りし、講師の先生方に改めてお礼申し上げます。

佐賀支部
諸井ミサヲ

明けましておめでと。ございます。日本女医学会のお一層のご発展を心よりお祈り申し上げます。昨年の佐賀は「世界・炎博覧会」が開催され、珍しく賑わいました。世界初の陶磁器製のカラクリ人形の発表が人気を集めました。何かの手段で、多勢の方に見ていただけようように保存されることを念じております。超大型立体映像「火の鳥」では、火の鳥が眼前まで飛びこんでく

鹿児島支部
長友由紀子

明けましておめでと。ございます。昨年は暮れになり厚生省のトップの不祥事が発覚し、とても残念な一年のしめくりとなりました。介護保険導入等、日々大きく変わる医療界さて今年はどうなることやら……ともあれ、今年も会員皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

第24回 国際女医学会のご案内

第24回国際女医学会はケニアのナイロビで開催されます。期日は1998年12月6日-11日です。テーマは女性の健康に関する研究となっています。第1回目のご案内は女医学会事務局にあります。ご参加、お待ちしております。

平敷淳子
National Coordinator

学生時代の体験



—昭和20年代—
神奈川支部 中濱昌子

私の学生時代は、昭和16年から昭和20年(終戦の年)までですが、昭和12年に日支事変が始まっており、入学時も戦時下という雰囲気でした。一年の昭和16年の12月8日に、あの

それ以上歩を進める気力もなく踵を返して道を変え、元へ戻りかけました。幸いにお友達の家が見付かりましたので、事情を話して荷物を預かって頂きお友達と二人で方角を変えて私の家の方へ向かいました。私の家は残っていません、また落ち着いて家から通学し始めました。昭和20年4月、いよいよ最上級で級は八

されていた例は、翌日ガーゼ交換に行ったら蛆が一杯わいていたとか、そういう例がたくさんありました。ある日は朝から警報が続き、今日は休講ということで午後3時ごろ学校を後にしました。郊外電車を降りてまだ夕方でもないのにおかしいナア、と思いつつ歩いていきますと煙幕だったのでしよう、少しづつ明るくなってきた。ふと気がつくと、こちら

いで、その満員の中へ先ほどの通学スタイルで無理に押し込み片足で立っている毎日でした。今ならとても出来る芸当ではないのですがその時は若さと緊張感で成し遂げたと思えます。いよいよ昭和20年8月に入りました。或る当直の朝です。飛行機からバラ撒かれたビラが校庭にも散らばっていました。朝露にしっかりと濡れたそのビラを拾ってみますと、「日本人よ、降伏しなさい」ということを達者な日本語で書いてあったのには驚きました。そしていよいよ8月15日終戦の日を迎えました。級の半分は別の病院へ行っていました。私は学校に残っていました。お昼に講堂に集まりました。電波の調子が悪く、陛下のお言葉は良く聞こえませんでした。が「耐え難きを堪え、忍び難きを忍び……」とおっしゃったお言葉ははつきり聴き取ることができました。

大東亜戦争が勃発いたしました。私は早く登校し、何も知らずに学校にありました。後から来た級友が慌ただしく教室に駆け込んで来ました。「大変々々、日米開戦と今ニュースで言ったわよ。」と。そこに居合わせ

時代でしたので、お休みは返上です。しかし昭和20年3月になり今後の方針などを決めるために親許へ帰されました。私は大阪でしたが父の会社

それ以上歩を進める気力もなく踵を返して道を変え、元へ戻りかけました。幸いにお友達の家が見付かりましたので、事情を話して荷物を預かって頂きお友達と二人で方角を変えて私の家の方へ向かいました。私の家は残っていません、また落ち着いて家から通学し始めました。昭和20年4月、いよいよ最上級で級は八

されていた例は、翌日ガーゼ交換に行ったら蛆が一杯わいていたとか、そういう例がたくさんありました。ある日は朝から警報が続き、今日は休講ということで午後3時ごろ学校を後にしました。郊外電車を降りてまだ夕方でもないのにおかしいナア、と思いつつ歩いていきますと煙幕だったのでしよう、少しづつ明るくなってきた。ふと気がつくと、こちら

いで、その満員の中へ先ほどの通学スタイルで無理に押し込み片足で立っている毎日でした。今ならとても出来る芸当ではないのですがその時は若さと緊張感で成し遂げたと思えます。いよいよ昭和20年8月に入りました。或る当直の朝です。飛行機からバラ撒かれたビラが校庭にも散らばっていました。朝露にしっかりと濡れたそのビラを拾ってみますと、「日本人よ、降伏しなさい」ということを達者な日本語で書いてあったのには驚きました。そしていよいよ8月15日終戦の日を迎えました。級の半分は別の病院へ行っていました。私は学校に残っていました。お昼に講堂に集まりました。電波の調子が悪く、陛下のお言葉は良く聞こえませんでした。が「耐え難きを堪え、忍び難きを忍び……」とおっしゃったお言葉ははつきり聴き取ることができました。

昭和19年4月、四年になりいよいよ臨床で病院の方へ移りました。しかし前半は順調で、ポリクリなどもゆつくり受けられました。後半になり戦況はますます険しくなり日本本土にも空襲を受けるようになりまし

時代でしたので、お休みは返上です。しかし昭和20年3月になり今後の方針などを決めるために親許へ帰されました。私は大阪でしたが父の会社

それ以上歩を進める気力もなく踵を返して道を変え、元へ戻りかけました。幸いにお友達の家が見付かりましたので、事情を話して荷物を預かって頂きお友達と二人で方角を変えて私の家の方へ向かいました。私の家は残っていません、また落ち着いて家から通学し始めました。昭和20年4月、いよいよ最上級で級は八

されていた例は、翌日ガーゼ交換に行ったら蛆が一杯わいていたとか、そういう例がたくさんありました。ある日は朝から警報が続き、今日は休講ということで午後3時ごろ学校を後にしました。郊外電車を降りてまだ夕方でもないのにおかしいナア、と思いつつ歩いていきますと煙幕だったのでしよう、少しづつ明るくなってきた。ふと気がつくと、こちら

いで、その満員の中へ先ほどの通学スタイルで無理に押し込み片足で立っている毎日でした。今ならとても出来る芸当ではないのですがその時は若さと緊張感で成し遂げたと思えます。いよいよ昭和20年8月に入りました。或る当直の朝です。飛行機からバラ撒かれたビラが校庭にも散らばっていました。朝露にしっかりと濡れたそのビラを拾ってみますと、「日本人よ、降伏しなさい」ということを達者な日本語で書いてあったのには驚きました。そしていよいよ8月15日終戦の日を迎えました。級の半分は別の病院へ行っていました。私は学校に残っていました。お昼に講堂に集まりました。電波の調子が悪く、陛下のお言葉は良く聞こえませんでした。が「耐え難きを堪え、忍び難きを忍び……」とおっしゃったお言葉ははつきり聴き取ることができました。



私の研修時代

昭和30年代

東女医学内支部 山口知子

私は女子医大に昭和31年に入学し、37年に卒業したまに昭和30年代を医学生として、そして終戦後に導入されたインターン制度にしたがって、卒業後国家試験受験前に一年間のインターン研修をした世代でした。医家の出身でもなく、まして理科系に進学するなど、女性の道として到底問題外というミッションスクールで小学校から高等学校まですごした環境で、医学の道をころござしたのは医師という具体的な職業をめざしていたというよりは、自分にとってあまりにも未知なる世界への好奇心と向学心でありました。

さて、いよいよ卒業を目前にして、どこでインターンの研修をうけるかという問題は当時の医学生にとってかなりの大きな選択でした。当時、優秀な学友たちは虎の門病院をはじめとする、学外研修に人気がありました。米軍病院は当時全国の国公立大学のアメリカ留学を目指している、優秀な卒業生たちの人気の的で、競争が激しく、アメリカの国家試験並の英語の医学に関する筆記試験があり、さらに、軍属将校医師団による、口頭試験があり、競争率もかなりなものでした。四つの米軍病院の

中で、横須賀にある米国海軍病院で採用された一四人のインターンのうち、二人だけが女性でした。

そこでのインターン研修は私が人生で、もっとも鍛えられた一年でした。一日おきの当直で、夜中に、アジア各地から集められて送られてくる、治療を必要とする海軍の軍人の初診や応急処置におわれ、また昼間は駐屯している軍人や家族の一般病院としての外来や、手術の助手など、一年かけて全科を経験しました。また、毎日夕方、4時から5時までは各科の専門医師による英語のレクチャーや試験等があり、4月にはじまって、もう夏には当時アメリカでインターンやレジデントとして医学研修を受けるために必要なTOEFLの試験を受験してほとんどの方が合格するという状態でした。インターンが一年後の3月におわって、国家試験はその後4月にありました。自分たちの研修後の方針を考えると、インターンの同僚ははっきり二派にわかれていました。国家試験のあと、すぐアメリカに渡って、さらにレジデントをするグループ、それに多くは出身校や他大学の大学院あるいは入局するグループの二つの

選択でした。

私は医家の出身でもなく、自分から一番遠い世界への好奇心で入ったみちです。毎日ここの患者との接触はともすればストレスでした。なにごとにもめり込む性格で、患者ひとりひとりに一生懸命のめりこんでいると、自分を失って到底やっていけないと思うようになりました。精神は物質によって支配されているのであろうかという、まだ、基礎医学でもっとも研究の未開の分野だった精神神経系の物質的解明というとてもない領域に挑戦することが私の選択でした。爾来、神経生化学が私の専門となり三十年余りが経過しました。さて、留学ということとは、基礎医学専攻者にとっては当然の経歴でした。若いうち二年間、アメリカ留学を経験したあと、子どもたちの成長した中年以降は、数々の海外共同研究の道でキャリアをのびてきました。現在フランスとの共同研究で記憶の分子機構をテーマに、教育義務のない時期に短期間でかけています。

さて、基礎医学を専攻した当時からの三つの難題テーマはガンと免疫と脳でした。どれをとっても何人たりとも簡単に解決できるテーマではありません。しかし、現在既におおくのことが解明されつつあるなかで、最後にのこったのが脳の問題です。二十一世紀は脳の世紀だというキャンペーンが展開され、おおくの研究



私の時代の研修を語る

昭和40年代

福岡支部 坂本雅子

者の参入の下で大型の研究費がこの問題の解決に投下されています。この道三十数年の神経研究一筋の基礎医学の道ですが、道の選択はあやまつていかなかったけれども、できれば、後進と共に研究組織をつくり、おおくきな研究テーマで、やれるところまでやってみてみたかったという無念さは隠せません。

一九六〇年から70年代は、ヨーロッパ、中国など、全世界で若者たちによる社会体制への反抗がくりひろげられた時代である。日本も60年安保、70年安保反対と大学改革を求めた闘争が全国的に展開されていた。医学部でも医学部闘争というかつてない過激な運動が行われた時代である。私は一九六二年(昭和42年)の九大卒であるが、入学のときからすでにインターン制度、無給医制度反対などのスローガンを掲げて、白衣デモを繰り返していた。そして、卒業後はインターンをポイコットし、41年卒と同時に直接入局した。医学部の闘争は、どの大学でもは

です。組織を作れる立場をまず獲得する政治手腕が必須であることを痛感するものです。いまだに、一人で修業僧のような道を選んできたという事です。自分の選択に対する責任をこれからも負っていかなければならぬでしょう。

私の外国共同研究修業歴のなかで言葉を理解し、行動することによって得る異国文化との出会いも無関係ではありません。自分をみがきつつ、修業を続けるのが私の道なのかもしれません。

った医局だったと思う。こんななかでも、二年間は曲がりなりにも、病棟医としての研修を受けた。しかし、当時から明らかに女性に男性との差があった。たとえば男性が珍らしい急性の症例の主治医になるのに、女性は喘息、慢性腎炎、回復期のリウマチ熱など慢性患者ばかり。はじめて難しい患者を受け持ったときの感激は今でも忘れられない。地方会などの学会発表の機会も男性が多かった。

44年になると、無期限ストにはいり、医局解体を求めて、学生と青医連は多くの医局を占拠し、大学の教育も研究も診療さえもストップする状態が続いた。この一年は研修らしいことは何もなかった。しかし、44年10月、医学部に機動隊がはいり、活動家は逮捕され、占拠されていた医局も開放され、その後はすべてが急激にもとに戻っていった。しかし、青医連の医者は医局に戻れず、市中病院に就職していった。わたしも福岡市内の病院に就職した。

結局、約三年間の医局の生活は闘争の毎日だったといえる。そして大学での臨床と研究の経験不足は、医者としての力不足として現在まで残っている。

医者には、ABCの三つの能力が必要といわれる。A=Academic, B=Behavior, C=Clinical. そして現在 Academic, Clinical は一応合格したとしても、むしろ医師としてのあり方 Behaviorに問題ありの

医者が多いことが指摘されている。私の研修時代は、AとCがなく、Bのみの時代だったのかもしれない。しかし、はじめに述べたように、どんな時代でも女性はいい研修に恵

私の研修時代

昭和50年代



大田支部 岩平佳子

私の研修時代には三つの転機があった。一つは当然のことながら形成外科を選択したことである。これは大学時代ハワイ大学へ夏期研修に出かけ巡り合った Dr. パルサーという形成外科医の仕事に感銘を受け興

まれることは稀で、自分なりに自分の能力を高めていかなければならぬものがある。私の時代は、それがすこし、極端に起こったにすぎないのかもしれない。

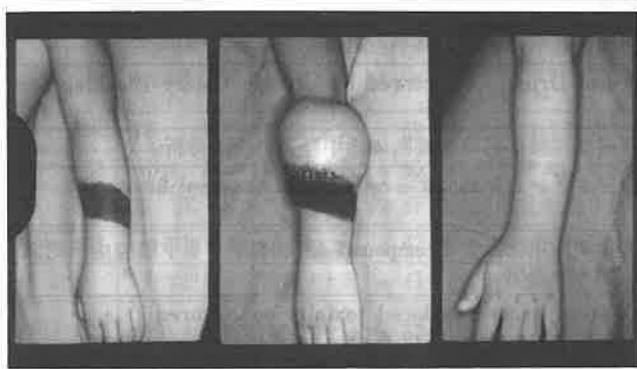
味を持ったせいである。しかし私の卒業当時、東邦大学の形成外科は第二外科の中にあつたため、私はまず外科に入局することになった。外科には女性がいなかったことから、私の入局は第二外科だけでなく病院内

でも少なからずセンセーショナルなものであった。しかし幸いなことに上司の丸山優講師(現・形成外科教授)は形成外科の医局創設のため猫の手も借りたい時期でもあり、差別を一切せず厳しく教育して下さったので余計な雑音に惑わされずに研修時代を過ごすことができた。

第二の転機はエキスパンダー(組織拡張)法との出会いである。医局で手にした米国会誌に載っていたこの方法には興味を持った。これはアザや癬痕などの隣接正常皮下にシリコン製バッグを挿入し、少しずつ生理食塩水を注入する。欠損を十分被覆できるほど皮膚が伸展したらバッグを除去し伸展皮膚にてカバーするという極めて単純な方法であつ

た(図)。私はどうしてもこの方法がやりたくなり米国に何通もの手紙を書いてとうとうエキスパンダーを入手した。日本で最初にこの方法を行なった学会発表したことは形成外科学会内でも大きな反響だった。手術だけでなくシンポジウムや依頼原稿など私は俄然忙しくなった。結果的に私はこの方法の応用が米国で評価され一昨年から留学につながったこと何となく不思議な巡りあわせのような気がする。そして今思えば入局してわずか半年かそこらの私に自由にやらせてくれた上司の理解によるものと感謝している。

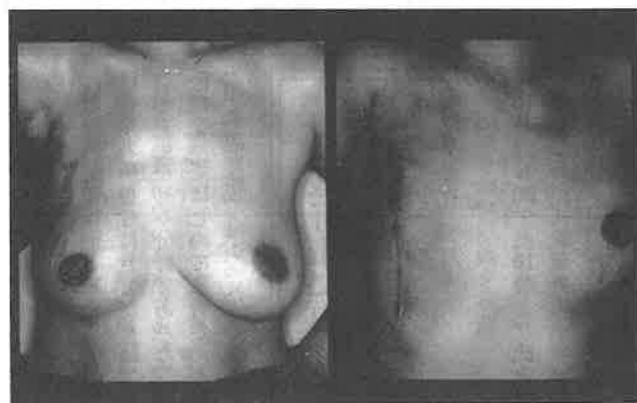
その後認定医、学位を取得し、エキスパンダー法に加えて乳房再建を専門として行うことになった。ある日乳癌研究会に出かけたところ、図らずもベルギー大学の形成外科教授が招待されていた。彼女は欧州初の形成外科の女性教授であり乳房再建を専門としていた。「この人に手術を習いたい」という私の思いが第三の転機となった。何の面識もなかったレジュール教授に手紙を書き、私はベルギーに向かった。彼女は六十歳を過ぎてはとも思えないほどパワフルな女性で、当初私はひたすら圧倒されたが、必死についていたことを評価していただけなのか、最後には「あなたは日本の形成外科の女医のバイオニアなのだから最後までがんばりなさい」という励まし



エキスパンダー法による前腕母斑再建例



エキスパンダー法による前額母斑再建例



乳房再建例

平成7年度 日本女医学会会員学位取得者一覧表

(学術部) 平成8年12月10日

全国医科大学80校に調査依頼し50校より回答あり結果346名の学位取得者中21名の既会員がおり、会員外で住所判明の320名に入会のお誘いをし8名の入会あり。(※印は平成7年度以前学位取得者)

(敬称略)

Table with columns: 支部, 氏名, 出身校, 卒年, 論文名. Lists members and their research topics.

理事会議事録

日時：平成8年6月30日(日) 午前10時30分

場所：ウイールあいち

出席者：佐藤、白浜、野澤、青井、石原、稲生、栗原、佐々木、橋本、松本、丸茂、大坪、加藤、川田、田中、久田、松本、宮原、村田、山本、吉崎、野呂、藤岡 (以上24名)

欠席者：中濱、佐野、野本、平敷、大澤、佐伯、鹿田、清水、西嶋、南雲 (以上10名)

4月理事会の議事録を承認。

議事検討事項

一、庶務報告 村田理事

別紙どおり報告、承認される。

二、会計報告 川田理事

平成8年4、5月分収支別紙どおり報告、承認される。

三、各部報告

【学術部】 橋本常任理事

・11月30日開催のワークショップの概要についての説明、確認をとる。

・UNISEFからのアンケートは豊高支部の堀口文先生に回答願う。

・MNTAからの研究助成の応募要項

を日本女医学会誌に記載する。

【広報部】 稲生常任理事

・6月20日に第147号会誌割付会議を開催。

【渉外部】 松井常任理事

・総理府男女共同参画促進連帯会議の構成員の推薦依頼があったとの報告があり、佐藤会長よりの松井常任理事推薦の意見に全員賛成で決定。

四、第42回定時総会について 順調に準備中。

五、自治省地方分権促進委員会への要望書提出について 「保健所長資格等見直し等反対」の要望書を提出したとの報告があった。

六、国連総会NGO代表について 女医会として加藤理事を推薦したが、他の人に決定したとの報告があった。

七、高知県女医会よりの要望書について 女医の権利確保(特に産前産後、育児休暇)のため女医会として推進することを期待されているので、次回へ継続審議。

八、定款改正について 次回理事会にて最終的な検討するので各自で再確認をとるの要請があった。

九、兵庫県支部一議員の問い合わせについて 七の議題と併せて女医の基本的権利を守るため早急に日本女医学会で検討委員会を設置する方向で検討する。

一〇、医療奉仕への助成について 募集要項の原案を事業部で作成し、選考委員会を設置することに

Table with columns: 支部, 氏名, 出身校, 卒年, 論文名. Lists members and their research topics.

武蔵野市における 日本女医学会公開講演会

事業部 丸茂 昌子

10月22日(火)午前10時より武蔵野市公会堂において武蔵野市中学校PTAの研修会が行われ、日本女医学会長佐藤千代子先生、吉永陽子先生が講演された。

山崎前会長の肝入りによっていまや最も重要視されている青少年教育、エイズ教育こそこの両先生のコンビの講演がPTA研修に最適であるとのご判断によって日本女医学会がこの研修会の講師を受け持つことになり一般にも解放され講演会が実現された。山崎先生のご努力とPTAの熱意により当日は大変盛況であった。約二〇〇名の聴衆は直接的な両先生のご講演に聞き入って二時間の講演時間がアツというまに過ぎて行った。地道な佐藤先生の電話相談活動にみる子供たちの姿や、吉永先生の冷静に事実を見つめた話など、形式的でなく、真剣に考えさせられる内容であった。

えていただいた。帰国後、大学を始め方々の病院でお願いしてできるだけ乳房再建の症例を集めた。思いがけなく乳房再建は自分が女医であることを生かせる分野であった。外科医になつてはじめて患者さんたちは「先生が女性で良かった」と喜んでく

れた。そして今、私は乳癌術後には乳房再建をすることが当たり前になることを目標に活動を続けている。私の研修時代はいくつかの出会いと運に支えられていた。「意志ある所に道はある」これが私の座右の銘だが、今後もこの精神で精進したい。

エイズは男性の感染率は0・1、1%であるが女性には100%の感染率の場合もあるという吉永先生の話はお母さんたちに大きなショックであったに違いない。思春期の子供を持つお母さんたちはこのような知識が最も求めたことであり、それがベールを脱いだように明確に話されたことに大きな感銘を受けたという反応が見られた。このような講演を生徒たちや若い人たちに聞かせたかったという感想が多く聞かれた。またこうした話はなかなか子供にはいえないと思っていた人々も自信をもって話してやれるとの感想もあつたとのことであつた。こんなにエイズが問題視されているのかかわらず、依然として性交渉による患者の増加が続いている現在、まだまだ一般のそれに対する関心は少なすぎるといわねばならない。今回の反応からもなお一般に関心を持たせる活

理事会議事録

決定。本年度より広く公募する。
一、その他――なし

以上
副会長(庶務部担当) 白浜
石原、橋川、鹿田、久田、村田

日時：平成8年9月28日(土)
午後3時30分

場所：京王プラザホテル
出席者：佐藤、白浜、中濱、野澤、
石原、稲生、栗原、佐々木、橋川、
松井、大坪、加藤、川田、鹿田、
清水、田中、久田、西嶋、松本、
村田、吉崎、野呂、藤岡、宮原
(以上24名)

欠席者：青井、野野、野本、橋本、
平敷、丸茂、大澤、佐伯、山本、
南雲 (以上10名)

6月理事会の議事録を承認。
議事検討事項

一、庶務報告 鹿田理事
別紙とおり報告――承認

二、会計報告 西嶋理事
平成8年7月分、8月分収支別紙
とおり報告――承認
栗原常任理事より現在までの会費
納入状況の説明があった。

三、各部報告
【渉外部】 松井常任理事
・「男女共同参画推進連帯会議」出席
の報告。
【事業部】 佐々木常任理事
・「群馬県、母乳育児を広める会」は

吉岡弥生賞へ申請する。
【広報部】 稲生常任理事
・第148号会誌の割付会議9月20
日に開催。
【学術部】
全員欠席につき佐藤会長代読
・11月30日開催予定のワークショップ
順調に準備中。
・MWIAへ依頼されたデータベース
を送付。
・ユニセフからのアンケートを堀口
文先生から回答済。

【会長報告】
・25日に行われた「被災者の医療・
保健活動に対する厚生大臣感謝状
授与式」に会長代行として白浜副
会長が出席、賞状を受領した。
・日本医学教育学会の模様が「Medi-
cal Tribune」誌に詳しく掲載され
ている。
・配付した「公募・助成一覧」を参照
に候補者の推薦を依頼。
・東京都支部連合からの「歌舞伎座
観劇券購入の依頼」への協力を要
請。
四、定款改正について
・厚生省から指導箇所に基づき再検
討した。改めて厚生省に申請する。
・「東京都支部連合の会長を理事に」
の一文を細則に入れることにする。
五、入会のしおりについて
・「入会のしおり(案)」を検討した。再
度作成し、次回理事会で討議する。
・各自の意見は庶務部に申し出るこ
と。
六、「女性の基本権利を確立するた

めの委員会」とくに女性医師の立
場から」の設置について
・総会時に出された要望を基に委員
会を構成することに決定。
・どのような形で構成し、運営して
いくかを検討し討議したが、次回
常任理事会にて詳細に再審議する。
七、地域医療の助成について
・「地域医療奉仕に対する助成規約
(案)」を検討したが、次回理事会で
再討議する事に決定。
・各自の意見は事業部に申し出るこ
と。
・規約決定後、会誌に記載し広く公
募する。
八、メガネ提供の依頼について
・今回は提供せず、現在ある三八八
個は事務局で保管する。
九、その他
・中国内蒙古医学院卒業の一女医よ
り日本女医会入会の希望があった
との報告で、どのように対処する
か検討したが、一度面談してから
決める。
・東京都支部連合会よりの歌舞伎座
観劇券購入の再依頼。

会員動静

新卒入会者(敬称略)
荒川支部 上野川久美
新宿支部 森川英恵
岐阜支部 高橋知子

副会長(庶務部担当) 白浜
石原、橋川、鹿田、久田、村田

滋賀支部 辻和良
岡山支部 井上真紀
愛媛支部 徳永景子
長崎支部 弓削七重
入会者(敬称略)
北海道支部 福島順子
福島支部 田中里香
千葉支部 伊賀恵美子、柳橋京子
神奈川支部 周明珠
葛飾支部 網代成子、加藤満利子
野村明子
新宿支部 宮田真千子
世田谷支部 大西玲子、原茂子
港支部 荒木葉子
目黒支部 入野千寿
三重支部 川村真奈美、松本知子
大阪第2支部 生方雪子
大阪第3支部 川村くに
大阪第6支部 河野陽子
大阪第7支部 名村章子
大阪第8支部 長野礼子
兵庫支部 斉藤秀美
福岡支部 奥野徹子、織田郁子
長崎支部 柿添由美子
退会者 二十九名
物故者
岩手支部 野村サテ
宮城支部 菊池久子
埼玉支部 荒井糸子、榛沢芳江
中野支部 奈良和子
都下西支部 赤坂サナミ
愛知支部 平野ミズ子
大阪第4支部 田辺富規枝
大阪第9支部 松尾昌子
岡山支部 折橋秋子、津田操
愛媛支部 吉良昌子

佐賀支部 吉岡ソノ
集記
年頭のご挨拶に諸先生が揃って、
昨年の許せないニュース、年末のペ
ルーのテロ、中でも厚生省関連のエ
イズ薬害、官僚の汚職事件に、憤り
をあげておられる。医療保険制度も
改革が改悪にならないかと思
う。世界一高齢者の国を誇っている
うちに、気がついたら少子時代の日
本になっていて、小学校の新入児童
数が四十名という学校も出て来てい
る。N先生の「学生時代の体験」で、
私も昔が思い出された。当時、人口
の年齢構成はピラミッドが栄え、逆
ピラミッドになったら、その国は亡
びると教育を受けた。世界一の借金
大国にもなった日本！一人の女医
としてできることを続けて、少しで
もお役にたちたい。新年に想う。
(佐伯)
平成9年1月20日 印刷
平成9年1月25日 発行
編集人 稲生 襄
発行人 日本女医会
発行所 東京都渋谷区渋谷2-
8-17 青山宮野ビル
社団法人 日本女医会
☎三三九八一〇五七一
FAX三三九八一八七六九
制作 東京都文京区水道1-
5-16
株式会社 金剛出版